

清酒「千福」と海軍（1）

平間洋一

安政年間創業

海軍士官や海上自衛隊員ならば、知らぬ者のない清酒「千福」の醸造元の三宅本店は、三宅清七により安政三年（一八五六年）に味淋・焼酎・白酒の製造販売から始められた。そして、清七の後を継いだ初代清兵衛が清酒醸造に踏みきったのは明治三五年、呉に市政が布かれた年であった。

筆者注、三宅本店の銘柄は初め「呉鶴」「呉菊」などが主なものであったが、昭和になって「千福」が主力商品となって有名になった。

三宅本店の初年度の醸造は三七六石であったが、明治三九年には三千石台となり広島県の首位に躍進、大正三年には五三三八石と五千石台に達し、兵庫県以西、西日本の首位を占め、昭和十二年には全国六位と帝國海軍の拡充に伴い創業僅か二十年で全国八千の業者中の十指に入るまでに発展した。

この発展のきっかけとなったのが、海軍への納入によるものであったが、そのいきさつについて『三宅本店百拾年』には次のように記している。

三宅本店では海軍へ酒を正式に納入したいとかねてから切望していた。海軍とともに暮らし、海軍と共に繁栄してきた西日本随一の酒造家・三宅としては、当然の念願であろう。

それに日本の四軍港及び要港部の大湊、鎮海等の所在地ではこれといわれる酒造家もなく、名の通った酒を造っているのは三宅だけであった。もちろん、以前から納めてはいたが、それも他の酒造家も一緒に、納める酒もまちまちであった。

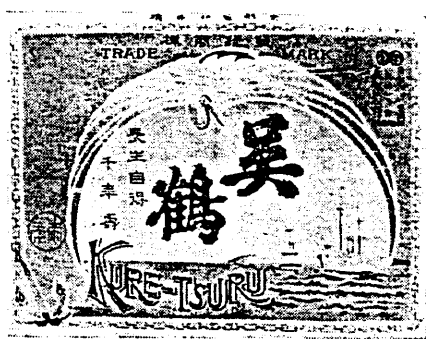
各軍港に一括納入

大正八年、艦船部隊購売部が新設されたのを機会に、思いもかけずにその機会が到来した。艦船部隊購売部の初代購売部主任は兵曹長上がりの海軍特務大尉・今井文四郎という人で、呉にはなじみ深い古参士官であった、間もなくその購売部から呼び出しがあり、係の店員・木村俊夫

が訪ねて行くと、今井特務大尉との間に話がすぐにまとまり、その年から艦船部隊に納めることになった。

今井特務大尉は親切で世話好きの人物であった。勝手のわからない特殊の世界である鎮守府管内はもとより、在泊中の艦内までランチで案内してくれて、艦内の酒保委員長や酒保委員に紹介してくれ、帰りには委員達の性格や扱い方まで教示してくれた。長い海軍生活の特務大尉だけにだれでも知っていて、海軍の虫といわれていた。

納品については、横須賀、呉、佐世保、舞鶴は各軍港地の購売部宛に一括納入し、そこから各艦船の酒保へ納める仕組みになっていたが、大湊、鎮海は直接納入するので、たいへいの場合、酒は特務艦に搭載して現地へ運び、現地で立ち会うために社員は汽車や商船でその地へ向かわなければならなかった。



「呉鶴」のラベル

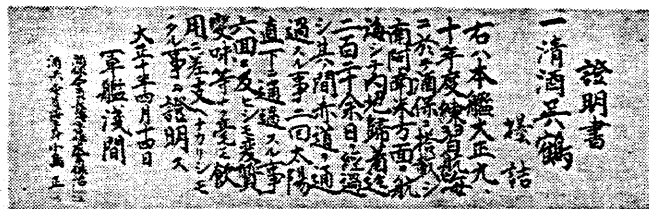
艦艇の場合には各艦艇の酒保を訪れて、次の寄港地に注文分の数量を先に運んでおいて入港を待つわけで、艦船の次の寄港地や寄港予定日もあらかじめ知らされていた。だんだん販路が拡大し、大連、旅順、澎湖島、サイパン方面にまで運送するようになり、全盛時には海軍だけで年三千石以上も納入したものであった。

防腐剤を入れない酒

三宅の酒が海軍購売部に納入後二、三年のうちにぐんぐんとその量を増やし、日本の全海軍区にその販路を広げるに至ったのは、やはりうまい酒という評判をとったことと、納入品に対する信用であった。

昔は戦地へ送り出す食糧や物資の中に、わざと何%かの粗悪品を混入して送ったり、中には漬物樽の中に石を詰め込んで送った御用商人があつたりしたが、大正の頃でもそれほど悪質ではないまでも、それでもなお上等酒の中に下等酒や等外品をまぎれこまして納める非良心的な商人は少なくなかった。

まずい酒を納めていれば将兵から苦情がでて、自然に淘汰されていくが、海軍の方で最も警戒したのは防腐剤の混入で、艦船積み込みの最中に突然抜き打ち検査を行ったりした。



軍艦「浅間」酒保委員長の証明書

その頃常習のホルマリン混入検査で、しばしば摘発されてその場で積み下ろしを命ぜられるというようなことも少なくなかった。

その検査に際し三宅の酒からは、そうした薬剤が一度も検出されたことがなかった。というのは瓶詰に防腐剤を入れない酒というのが三宅の酒の最初からの特徴で、腐らない酒というのをモットーとしていたからである。しまいには三宅の酒なら検査は要らぬといわれるようになり、両者の手間が省けて納入が円滑に、また敏活に行われるようになった。

三宅の酒は下士官兵集会所や水交社でも喜ばれたが、殊に艦船部隊では圧倒的に三宅の酒一辺倒であった。

大正九年から十年にかけて、南洋方面を行動した練習艦隊積載の酒が七ヵ月余の炎熱下に、味が変わららず賞味されて、酒保委員長から証明書を買った話が全艦船に宣伝され、俺

の艦もうちの部隊もということになり、益々信用が増した。

極寒地シベリアの酒

第一次世界大戦終了後、ロシアに革命が騒ぎが起り、日本がシベリアに出兵して鎮圧につとめたことがあったが、海軍は大正九年にウラジオストックに警備隊を派遣した。軍艦『石見』がそのために幾度となく内地とウラジオストックとの間を往返したが、その際には必ず三宅の酒を名ざして大量に積み込んで運んだ。ところが今度の場合は、南洋と反対に極寒地なので、四斗樽の方がよろうと両者が話し合い樽で送ることにした。ところが冬期になると海水が凍って艦の航行が途絶する港であるから酒も凍結してしまう。やむなく次の便からは瓶詰に代えたなどという失敗談もあった。

(防衛大学校教授、防大1期)

清酒「千福」と海軍(2)

— 飲用に差支なかりしことを証す —

平 間 洋 一

遠洋航海と「品質証明書」

大正九年(一九二〇年)日本海軍は「浅間」「磐手」で編成した練習艦隊は初めて世界一周(西廻り)の遠洋航海を実施した。遠洋航海に出発前に寄港した「浅間」は、三宅の代表酒「呉鶴」を多量に積み込んで出港した。日本酒は従来一年酒とされており、夏を越すと余程保存がよくない限り、内地でも多少味が変わる。それを艦隊は赤道を往復するので、それだけでなくも暑さに弱い日本酒を、南方に携行して腐敗しないか

否かが問題となった。三宅は断固としてこれを保証した。

携行した結果は赤道を通過して向こうに着いた時にも、少しも味が変わっていないばかりでなく、再び逆に通過してアメリカに入港した時にも変わっていなかったということ。「浅間」の酒保委員長から品質を保証する証明書が贈られた。これが前号(6月通巻271号)36頁に掲載した写真の通りである。

編注、この証明書にある酒保委員、小島

正大尉は其40期で、大正12年と13年頃東郷元帥副官を勤め、その崇敬の念を

「人間・東郷の真諦を見る」と題して「東郷」に寄稿されている。(記念特集号14頁に収録)

練習艦隊の世界一周は大正九年から三年続いたが、大正十三年からは北米方面、豪州方面、欧州方面が交代実施されるようになった。

大正十五年の練習艦隊は「八雲」「出雲」で編成され、欧州方面の遠洋航海を実施した。この時「出雲」が三宅の銘柄で出て来た「千福」を初めて搭載して遠洋航海に出た。このときも前の「浅間」のときと同様に品質はピクとも変化しなかった。ここで「出雲」の酒保委員長も、次のような品質証明書を出した。

「証明書」

一、清酒「千福」塚詰

右八本艦大正十五年年度練習艦隊卜シテ遠洋航海中、酒保ニ搭載シ地

中海、阿弗利加東岸二回航シ、日ヲ
閱スルコト二百余日、其ノ間印度洋、
紅海ヲ往復シ、赤道ヲ通過スルコト
四回ニ及ビシモ、變質、變味等ナク
飲用ニ差支ナカリシコトヲ証ス

昭和二年一月二日

軍艦出雲

酒保委員長

海軍中佐 難波常三郎印

酒保委員

海軍少佐 大崎 安見印

編注 練習艦隊の遠洋航海

◎大正九年度(9・8・10・4)

司令官 船越楫四郎中将・兵16期

副司令官 小山田繁蔵大佐・兵27期

艦長 鳥崎 保三大佐・兵27期

候補生 兵48、機29、経9各期

(この年初めて機、経参加)

航路一東南アジア一印度洋一南ア

フリカ一南米南端廻り一南米西岸

一南洋群島

◎大正15年度(15・6・昭2・1)

司令官 山本 英輔中将・兵24期

副司令官 植村 茂夫大佐・兵31期

候補生 井上 継松大佐・兵32期

初任医官(大正14年から参加)

航路一東南アジア一印度洋一スエ

ズ運河一地中海各地一印度洋

「浅間」酒保

委員長 成富 保治中佐・兵30期

委員 小島 正大尉・兵40期

「出雲」酒保

委員長 難波常三郎中佐・兵35期

委員 大崎 安見少佐・兵39期

酒造家にとつては、へたな勲章を

貰つたよりも名譽で誇りがましい証

明書といえよう。科学処理の進んだ

現代でも、二百二十日余りも赤道の

近くを往つたり来たりして、焼ける

ような暑さに蒸されたら、酒の味は

保証しかねるのではあるまいか。南
方用だからといって、『呉鶴』や
『千福』にそれだけの防腐処置を施
したわけではない。要は造る側の良
心の問題といえよう。

近年でも一年酒ということが常識
となつてゐるが、それは日本酒が夏の
暑さに弱いことを自らが証明してい
るようなもので、しっかりした酒な
らそんな筈はないし、またそんな酒
ではどうかと思う。

あるいはビールに影響されてい
る点があるかも知れないし、毎年一定
の醸造酒を売り切るための工作かも
しれないが、せつかく樽詰を樽詰専
用に、防腐処置まで施しながら、

なおかつ日本の夏程度の暑さで味が
変わるようなら、それは日本酒の規
格を喪失した酒といわれても仕方が
ないであろう。

いずれにしても大正九年ごろの、
赤道直下を通過して腐らない三宅の

酒の真価は、これによって大いに再認識され、特に海軍で特別の人氣を集めたのであった。それにしても当時の海軍軍人として、こんな証明書を書き、しかも連名で出すとは洒落た軍人さんも居たものである。

第一次上海事変の納入

昭和七年の第一次上海事変の時には、特務艦『労山』が一升瓶詰一打入り五百箱を搭載して上海に向かった。三宅からも係員の木村俊夫が派遣されて便乗した。着いてみると直接陸戦隊へ納入しろということなので、トラックに積み直して呉淞棧橋に向かい、途中で敵弾の洗礼を受けたこともあった。

こうして海軍への納入だけで年々三千石を越えるばかりか、呉海軍工廠の購買組合にも、要請によって『廠の友』と名づける酒を納入した。

この他に海軍工廠への特定銘柄と



しては、『東洋一』『国防』『海防』などがあった。艦船部隊購買部も海軍工廠購買組合も、値引きのために三宅としては、たいして採算の採れない納入であったが、そのために品質を落とさないというのが motto で、消費者の方もその点は絶対信頼を置いていた。

第二次大戦の納入組合

昭和十六年の大東亜戦争突入の前あたりから、配給米不足のためどの酒造家も減石を重ね、三宅あたりも最盛時の四十%位に落ちていた。そのため、軍部が要求する酒もおいそれとは石数が揃わず、ついに陸海軍から、各地の有名メーカーが納入組合を作って納入の円滑を図って貰いたいという要請があり、各地区に別れて組合を結成することになり、広島以西は『桜星会』、灘方面は近畿以東を担当して『竹友会』と名づけられた。

それをまた海軍と陸軍とに分け、桜星会の海軍納入事務所を三宅本店内に、陸軍納入事務所を西条の賀茂鶴株式会社内に置いて、各メーカー連繋のもとに、支障を来さないように努力を続けてきたが終戦と共に解消し、ここに海軍との長い付き合いは終わった。

(防衛大学校教授、防大1期)

清酒「千福」と海軍(3)

—海軍、海上自衛隊との縁故—

平 間 洋 一

戦災—海軍が派遣防火隊

昭和二十年七月、空襲により千福の工場が戦火を受けたが、その消火作業に海軍が出動しそのお礼に海軍が酒を散水車で貰い、またそのお礼に海軍が千福の再建に協力したという記事が社史にあるので紹介しよう。

大正庫の火は一向に衰えない。火を噴いている間は危険でもあるし、熱気のため付近を片付けることもできない。階下は酒の貯蔵庫になっていて、現に何千石という酒が桶の中に眠っている。できたら無事に取り

戻したい。そこで海軍防備隊に消火を要請することになって、懇意な憲兵隊長藤本憲兵中佐を通じて、呉鎮守府参謀長に頼んで貰った。その理由というのが、倉庫の酒には、莫大な酒税がかかっている。無事に助け出すことが出来たら、それだけ国庫

の財政を助けることになるうえ、物資不足の折柄、軍や国民の士気を昂揚する大切な生命の水であるというものであった。そして、これを助けることは即戦力昂揚の一助となると信ずるから、防火隊を派遣して欲しいという要請であった。考えたもの

である。ところがこれが海軍側の入れるところとなり、快く防火隊の派遣を応諾してくれた。中前海軍少佐の率いる防火隊が駆けつけると、そこは専門家である。二階の鉄扉を打ち破り、各窓から幾条ものホースを挿入して水を注ぎかけると、ようやく火勢が衰えついに鎮火した。蔵人たちが階下の貯蔵酒を点検してみると、灰やほこりで多少汚れた桶もあったが、味に変わりはなく完全に焼失を免れていた。

散水車で酒を運ぶ

しかし、これまでは温度を調節した冷蔵庫の中で貯蔵していたので別条なかったが、冷蔵機を焼失した夏季三十二度以上の炎天下で、そのまま外気を当てて放置すれば、どうしても腐敗変質の危険がある。そこで税務署と折衝の末、市民や軍に無料で配給するという条件のもとに、火

災による損失として処理することを許可された。酒は言葉どおり全部無料でもらうまい。まず世話になった海軍の残留部隊、鎮守府、防備隊、諸官庁、諸会社の関係方面へ被災見舞いとして分配、呉市の被災民十万余人に、一人当たり一合当て無料配給といった具合である。被災者の中には容器も焼けて、鍋・釜・バケツ・桶・びんをもって、延々長蛇の列をつくり本店から電車通りまで続いた行列が、何時間も立ち尽くした末に喜々として各容器に満たして帰って行ったという。奮っていたのは海軍である。何しろ大世帯だけにちょっとした容器では間にあわない。撒水車を連ねてやってきて、そのタンクの中に詰めて運び、貯蔵には大きな風呂を消毒しその中に一応充満させ後から容器を探したという。

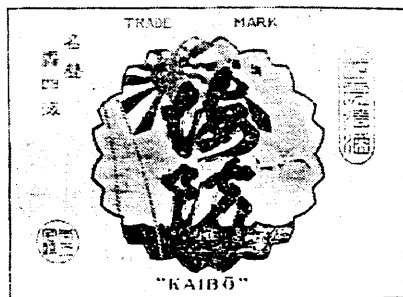
再建の努力

何にしても思い切ったことをしたものである。三宅家の善行は世に知られており、初代清兵衛時代から数々の救済―貧民、孤児、病患者―など社会事業といえは何をおいても率先して多額の寄付をしているが、自家が殆ど丸焼けに近い状態に被災しながら、売り物の酒を何百石も無償で放出するということはなかなかできることではない。しかし、こうした善行が後の再建に大きく影響し、市民の有形無形の援助が、今日の三宅を築く礎をなしたのである。その好例が海軍である。完膚なきまでにたたきつけられた海軍は、終戦とともに瓦解したが、鎮守府、工廠が残した資料や設備を野放しにするわけにも行かず、しばらくは敗戦後も管理のために将兵が置かれていた。

三宅としてはどんなにたたき付け

られても、まず酒を造ることが先決である。九棟の醸造蔵のうち焼け残ったのは明治庫と呼ばれる最も古い五号蔵と、鉄筋作りの大正庫だが、大正庫は外壁が残っただけで貯蔵庫のあった二階は殆ど全滅、そのままでは使用できない。そこで応急処置を施して、とにかくその仕込み間に合わせるためには相当の資材を必要とするが、市の三分の二を焼失した被災都市の再建はどこも同じことで極度の資材難であった。そこで目をつけたのが海軍が保有していた資材の活用である。社の者が敗戦処理のため残された当局を訪れ、払い下げ方を懇請すると、三宅本店と聞いて「三宅なら借りがある。空襲の時に酒を撒水車で配給してくれ、将兵達が大変に喜んでくれたことは未だに忘れてはいない。われわれで出来ることがあったら大いに尽力する。どうか一日も早く復興して、またうま

各種銘柄のラベル



い酒を造ってくれ」と言って関係者一同に呼びかけ、払い下げ方に協力してくれた。そのため曲がりなりにその年の仕込みを終えることが出来たということであった。

後日談

このような海軍との特別の関係からか、例年練習艦隊の呉入港時や防衛大学の夏季訓練時の見学などでは特別の接遇を行っているが、特に昭和五九年の呉地方隊開隊三十周年記念に際しては宮利を度外視して、「祝 呉地方隊開隊三十周年」の特別ラベルを付した清酒を特別に造り、呉市内に多数の「祝 呉地方隊開隊三十周年」との祝賀看板を立て、祝賀ムードを盛り上げてくれた。また、現在同社社長三宅清兵衛氏は呉自衛隊協力会会長でもある。

(防衛大学校教授、防大1期)